

Cure to Care

第 5 話

與儀 達朗

【登場人物】第5話

町田 翼（32）： 救急・訪問診療医

村井 正和（50）： 訪問診療所院長

五十嵐 隼人（28）： 訪問診療所アシスタ

ント

金城 恵（36）： 訪問診療所アシスタント

山崎 香織（55）： 居宅ケアマネージャー

鈴木 健（52）： 外科部長

高橋 卓也（29）（28）： 訪問診療医

我那覇 さくら（28）： 有料老人ホーム

花の看護師

新井 亮（29）： 町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）： 前田救命センター看護

師

松村 元気（28）： 訪問薬剤師

石原 翔（37）： 外科医

松田 士郎（80）： 町田主治医の施設患者

菊池 和夫（80）： 高橋主治医の施設患者

松永 苑子（75）： 居宅患者

佐々木 ツル（85）：居宅患者  
棚原 仁（50）：患者の息子  
棚原 空子（45）：棚原仁の妻  
島崎（30）：町田の後輩の救急医  
白井（26）：有料老人ホーム花の看護師  
池上（40）：リクルート会社社員  
マリ（25）：キャバ嬢  
チカ（25）：キャバ嬢  
店員（26）：キャバクラのボーイ  
島田（35）：高橋の元職場の指導医  
三浦（55）：高橋の元職場の救急部長  
患者 A（80）：施設患者  
患者 B（70）：高橋の元職場の患者  
患者 C（55）：高橋の元職場の患者  
家族 B（55）：町田主治医の施設患者家族  
家族 C（60）：町田主治医の施設患者家族  
救急隊員 A（28）：救急隊員  
救急隊員 B（25）：救急隊員

【あらすじ】（第5話）

新井の同期で訪問診療医の高橋と出会った町田。高橋が多数の患者を抱えて膨大な利益を上げている一方、患者家族や他の医療者とトラブルを抱えていることも知っていく。

ある日、施設内で高橋の患者が急変する。偶然居合わせた町田は、高橋の診療を助け、彼に足りない「経験」を伝えるのであった。

第5話 「経験」

○レストラン・玄関先

町田翼（32）が、高橋卓也（29）  
と向かい合っている。

町田「訪問診療？」

高橋「そうです。雇われですがこのあたりの  
クリニックで院長をしています」

町田がもう一度名刺を確認すると「い  
きいきクリニック 院長 高橋卓也」  
と書いてある。町田のポケットのスマ  
ホが鳴る。

町田「ごめん、ちょっと」

スマホを耳に当てて、高橋と新井のそ  
ばを離れる。

新井「高橋って、救急専攻医は？」

高橋はふっと笑い、新井 亮（29）  
の方を見る。

高橋「新井はまだその世界にいるの？」

新井「どういう意味だよ？」

高橋「当直、残業、薄給、上司や組織へのストレス。正直、しんどくない？」

新井が黙って話を聞いている。

高橋「人生なんて一度きりだろ？ そんな世界に俺は見切りをつけた」

高橋「患者は多いけど、自分のやりたいようにできる。お前もこっちの世界に来いよ」

新井の肩を叩く高橋。

新井がなんとも言えない表情を浮かべている。電話を終えて戻ってくる町田。

町田「ごめんね」

戻ってきた町田を見る高橋。

高橋「もしかしたら施設で町田先生とお会いするかもしれません。その時はまた宜しく  
お願いします」

軽く会釈し、その場を立ち去る高橋。

立ち去る高橋の後ろ姿を見ていた町田  
だが、ふと横を見ると新井が浮かぬ表情をしていることに気付く。

町田「新井、どうかした？」

新井「いや、なんもないですよ。それより先輩、この辺に美味しいたこ焼き屋があるみたいで……いきましよう」

新井の表情が店を出た時に戻っている。

町田「えー、もうお腹いっぱいだよ」

新井「先輩、お願いします」

町田がうんざりした顔をしながら、新井の後ろをついていく。

○有料老人ホーム花・個室（朝）

患者A（80）がベッドの上で寝ている。町田が患者Aの聴診を終える。

施設看護師の我那覇さくら（28）と

訪問診療所アシスタントの金城恵（3

6）がベッドサイドに立っている。

町田「我那覇さん、最近の様子は？」

我那覇「最近、下痢が多い気がします」

町田「下痢か……」

ノートパソコンで電子カルテを見て考え込んでいる町田。個室の扉が勢いよ

く開き、松村元気（28）が入ってくる。扉が開いた音に気付き、扉の方に視線を向ける町田。

松村「すみません、初日から遅れましたわ」

町田が松村に軽く会釈する。

我那覇が軽く呆れた表情で松村を見ている。松村が我那覇の視線に気付く。

松村「さくらちゃん、車出そうとしたら積んどった点滴に穴があいててな、それはもう大変やったんよ。それでなー」

腕を組んで呆れた表情をしている我那覇が松村の言葉を遮る。

我那覇「もういいよ」

我那覇が手のひらで町田と金城を指し示す。

我那覇「こちら、村井訪問診療所の医師の町

田先生、アシスタントの金城さん」

松村「私こういうものです、よろしく頼みますわ」

町田に近寄って笑顔で名刺を渡す松村。



町田が名刺を見る。「訪問薬剤師 松

村元気」と書かれている。

町田「訪問薬剤師？」

我那覇「今月から、訪問診療に薬剤師が同行

してくれることになったんです」

我那覇「松村は私の高校時代の同期なんです。

もっとしっかりした人が良かったなあ……」

冗談半分の表情で、松村を見る我那覇。

松村「失礼やわ、さくらちゃん。町田先生、

薬の相談とか力になりますわ」

我那覇に鋭い表情を一瞬見せるが、直

ぐに町田の方を振り返り、笑顔を浮か

べている松村。

松村の勢いに少し戸惑っている町田。

松村が町田のしている電子カルテに顔

を近付ける。

松村「町田先生、患者さんもしかして下痢し

てないですか？」

町田「ええ。なんでわかるんですか？」

驚いた表情で松村を見る町田。

松村「下痢の報告多い菓結構飲んでるなと思ってる」

町田「この薬とか切ろうかなと思ってる。松

村さんどう思う？」

松村「僕もね、これ切ろうと思ってましたわ。

町田先生とはほんま気合いそうや」

町田「ありがとう、これ一回切ってみようか

な」

楽しそうに会話している町田と松村。

二人の姿を見ている我那覇と金城。

我那覇が金城の耳元でささやく。

我那覇「悪いやつじゃないんで、よろしくお願ひしますね」

金城が微笑んでうなづく。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

町田がデスクで書類仕事をしている。

横の五十嵐隼人（28）がノートパソコン

コンを片手に町田に声を掛ける。

五十嵐「町田先生、これ見ました？」

町田が五十嵐の方をみる。

五十嵐が自身のノートパソコンの

画面を町田に見せる。画面にはいき

いきクリニツクの診療所のホームページ

ジが写っており、「好評につき患者数

増加中、現在300名」と表記されて

いる。

町田「いきいきクリニツク……」

何か覚えのある様子で、町田が名刺入

れの中を探し始める。

五十嵐「隣の訪問診療所らしいです。患者

数うちの2倍ですよ」

名刺入れから、高橋からもらった名刺

を取り出す町田。

五十嵐「医者是一人らしくて、実際こんな患

者診れるんですかね？　ここだけの話、単

価が高い訪問診療なら、このお医者さん相

当稼いでいますよ」

改めて名刺の「いきいきクリニツク

院長 高橋卓也」の文字を見ている町

田。

○有料老人ホーム花・個室（朝）

松田士郎（80）がベッドで寝ており、

町田が聴診を終える。横に立っている

我那覇と五十嵐。

町田「松田さん、肺炎か気管支炎かな」

町田「我那覇さん、特指示で抗生剤の点滴と

お願いしたいんですけど大丈夫かな？」

我那覇「大丈夫です。あの町田先生……」

町田「どうしたの？」

我那覇「松田さん、よく痰が出しにくって

言っていたから、吸入併用なんてどうです

か？」

町田「確かに良いアイデアだね。併用してみ

ようか」

金城「町田先生、在宅酸素の手配とかどうす

る？」

町田「そうでした。お願いして良いですか？」

金城が町田を見てうなづく。

町田「助かります」

○有料老人ホーム花・個室（朝）

町田、五十嵐、我那覇の三人が松田の個室から廊下に出てくる。

○同・個室前廊下（朝）

個室から出てくる高橋と施設看護師の

白井（26）、松村の三人。

松村「高橋先生、ちょっといいですか？」

高橋「うん、どうした？」

松村「肝酵素が上がっているのでこちらの薬に切り替えはどうでしょうか？」

松村がアイパッドを高橋に見せる。高

橋がアイパッドを手に取り、数秒見た

後に、高橋に荒くアイパッドを返す。

高橋「使い慣れている今の薬でいく」

松村「今の薬だと、偽胆石症の報告も――」

高橋が鋭い表情で松村を見つめ、松村の言葉を遮る。

高橋 「これでいくって言っているじゃん」

松村 「……わかりました」

やや納得のいかない松村の表情に気付

く高橋。

高橋 「松村くんって薬剤師だろ？ 決めるの

は医者だろ」

黙っている松村。

廊下を歩き出す高橋。後ろから怖気付

きながら白井が高橋に声を掛ける。

白井 「高橋先生……」

少しイラついた表情で振り返り、白井

を見る高橋。

高橋 「なに？」

白井 「先生の患者さんの菊池さんですが、数

日前から熱が上がっていて――」

白井の言葉を遮る高橋。

高橋 「俺に何をして欲しいの？」

白井は勇気を振り絞り、口を開く。

白井 「患者さんも辛そうで、一度診察をして

欲しいです……」

不機嫌そうな表情の高橋。

高橋「解熱剤で様子見てよ。俺もたくさんの患者を抱えているから忙しいの」

白井「……わかりました」

○同・個室前廊下（朝）

一部始終（高橋、松村、白井のやりとり）を見ている町田、五十嵐、我那覇の三人。

五十嵐「あの先生ってもしかして……」

我那覇「いきいきクリニックの高橋先生」

五十嵐「隣町の訪問診療所？」

我那覇がうなづく。

我那覇「ここだけの話、他職種に対するリスクペクトがなくて、対応が最悪……」

町田は去っていく高橋の後ろ姿を心配そうに見つめている。

○村井訪問診療所・応接室（夕）

ソファ―に座って向かい合っている村

井正和（50）と山崎香織（55）。

ファイルを見ていた村井が顔をあげて、

山崎の方を見る。

山崎「この辺だと村井先生くらいしか、在宅

でガンの終末期を診てくれないのよね」

村井「山崎さんの頼みなら是非うちで受けた

いのは山々なんですが……」

村井「退院日はいつですか？」

山崎「まだ決まっていない、これから調整よ」

村井「時間をくれませんか？」

山崎「そうよね……」

村井がファイルを閉じる。ファイルの

表紙には「加藤 一志」の名前が書い

てある。

○居酒屋・カウンター（夜）

町田と新井がビールジョッキで酒を飲

んでいる。

町田「なあ、高橋くんって、どんな初期研修



医だった？」

新井「高橋っすか？」

町田「うん」

ビールジョッキを置く新井。

新井「優秀でしたよ。なんせ同期の中でエー

スみたいなやつでしたから。ただプライド

高かったり、コストパフォーマンス重視と

いうか……」

町田「高橋くんは、なんでまた救急科に？」

新井「俺と高橋だけ、初期研修医終わる時に

まだ進路決まっていなくて……」

新井「救急外来の当直って大体の病院は初期

研修医がやっているじゃないですか？」

町田「そうだな」

新井「俺らが研修した病院って上級医が少な

くて。でもその分、いろいろ経験させて貰

えたんですよね」

新井「その経験がまあまあ楽しくて、自信に

もなったというか……救急科ってシフト制

だしQOLも高そうだなって。それで二人

で救急科選んだんですよね」

新井「まあ高橋は、実家に近い病院を選んだので、僕とは離れましたけど」

町田と新井がビールジョッキを飲んで  
いる。新井が町田の方を見る。

新井「でも救急科の専攻医を実際やってみると、想像していた100倍きついです。先輩も分かりますよね？」

町田が苦笑いで新井を見て頷いている。

新井「そういえば、先輩」

町田「どうした？」

新井「今度、先輩の職場見学行っていいですか？」

町田が飲んでいたビールにむせる。

町田「急になんだよ？」

新井「あの後、高橋から連絡もらって。訪問診療、絶対一回見学行った方がいいって」

町田「嫌だ。高橋くんのところでいいじゃん？」

新井「先輩、自分だったら同期に診療見られるの、なんか気まずいでしょ？」

町田「俺だって元職場の後輩に診療見られるのは気まずい」

新井「えー、頼みますよ」

町田「絶対に嫌だ」

町田と新井が戯れ合いながら会話をしている。

○キャバクラ・ソファア（夜）

高橋がソファアに座ってシャンパンを飲んでいる。横にキャバ嬢のマリ（25）とチカ（25）が座っている。

マリ「高橋さんってお医者さんなの？」

高橋「うん、まあそうだよ」

自信満々な表情の高橋。

マリ「凄い」

マリが、敬服していた表情で高橋を見ている。

チカ「え、高橋先生。私最近体調悪くて相談していい？」

高橋「いいよ」

高橋、マリ、チカが喋っている。

キャバクラの店員（26）がテーブルに現れる。

店員「お客さん、そろそろお時間で……」

○キャバクラ・控え室（夜）

チカとマリが控え室で座っている。

マリ「高橋先生、羽振り半端なかったね。流

石は医者って感じ」

チカはマリの発言に頷くが、真剣な表情でマリを見る。

チカ「まあでも人間としては超上から目線っていうか……正直嫌い」

マリ「確かに。私もあの態度は、無理かも」

高橋の悪口で盛り上がっているマリとチカ。

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

村井訪問診療所の看板が立っている。

看板の村の字が少し剥げかかっている。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

新井が笑顔で村井の横に立っている。

町田が新井を渋い顔で見ている。一方で金城や五十嵐は、興味津々な表情で新井を見ている。村井が手のひらで新井を指し示す。

村井「今日診療見学にきてくれた新井先生」

新井「新井です、よろしくお願いします」

村井「新井先生は、町田先生の後輩だって？」

町田「そうです」

新井は笑顔で町田を見ているが、町田が気まずそうな表情で新井を見ている。

村井「新井先生はなぜ今回見学に？」

新井「はい、同期に見学を勧められたのと、

町田先生が訪問診療で働く姿を見たくて！」

町田が下を向き、頭を抱えている。

村井「そうなんだね」

村井が笑みを浮かべながら町田の方を見ている。

○車内・後部座席（朝）

金城が運転する車。後部座席に座っている町田と新井。

新井「なんか楽しみです」

町田「なんでお前と一緒になんだよ、普通は見学の同行って、院長の方だろ……」

新井「いいじゃないですか」

町田「冗談じゃないよ、やりにくいよ」

新井「どうしたんですか先輩？ 緊張してるんですか？」

町田「別にしてないよ」

新井が町田の耳元で囁く。

新井「高橋から聞いたんですけど、結構儲かるみたいですね」

新井が左手でお金のマークを作る。

町田「そんなことないから。やめろよ、そんな話」

町田が、新井の左手を軽く叩き。呆れた表情で新井を見ている。後部座席で

会話をしている町田と新井の様子をバツクミラー越しに、微笑ましそうに見える金城。

○松永宅・居間

松永苑子（75）が椅子に座っている。

金城が血圧計で血圧を測っている。

町田が戸棚の鍵をチェックしている。

新井が松永を見ている。

金城「苑子さん、血圧とかバッチリですよ」

松永「そうなの、ありがとう」

新井が町田に耳打ちする。

新井「先輩、この患者さんって俺がー」

町田「この前、お前がドクターカーで運んだ」

新井「ですよね？」

新井が興奮気味に苑子に近づく。

新井「この前、救急車で一緒にいた新井で

す。覚えていますか？」

松永「ああ、ツナギの方でしょ」

新井「ツナギ……」

軽くショックを受けた表情をしている

新井。町田と金城が顔を合わせながら、  
笑っている。

金城「苑子さん。娘さんともお話して、市  
販薬を飲むことが多い娘さんの薬棚には鍵  
をかけています」

町田「救急搬送を防ぐ、在宅における工夫で  
すよ」

町田が優しい表情で苑子を見る。

苑子「ありがとうね、町田先生」

新井が感心した表情で、町田を見てい  
る。

○佐々木宅・居間

佐々木ツル（８５）が椅子に座ってい  
る。金城が血圧を測っている。画面  
に写った数値に少し驚いている新井。  
町田が佐々木と向かい合っている。

町田「佐々木さん、最近何か症状はありませ  
るか？」



佐々木「なんもないよ」

町田「湿布貼ってから、血圧少しよくなって  
いると思いますよ。ありがとうございます。  
引き続きお願いしますね」

黙って佐々木がうなづく。

新井「先輩、内服の降圧薬とか――」

町田は優しそうな表情で、新井を見て  
人差し指を唇にあてて発言を遮る。

新井「え、どういうことですか？」

町田「まあ、あとで説明するから」

新井の左肩を叩いて、佐々木の玄関に  
向かう町田。

○車内・後部座席

金城が車を運転している。後部座席に  
座っている町田と新井。

町田「新井ならさっきの佐々木さんみたいな  
患者さんどうする？」

新井「まあ俺なら内服の降圧薬を……」

新井と町田が喋っている。

○有料老人ホーム花・会議室

町田が施設患者家族のB（60）とC

（55）に対して面談をしている。

「終末期医療に関する意思確認書」の  
用紙は手元に持たず、横に置いてある。

町田「施設で急変した場合には、病院搬送

をして治療を受けたいということですね」

町田は一度、下を向いて手元の患者の  
書類に「95歳、全介助、高度認知症  
にて抑制有り」と書かれている箇所を  
見ている。

町田「前の職場で、集中治療室も担当させて  
もらっていたので、本人の人生観をもとに  
搬送後の治療も考えてみませんか？」

患者家族のB、Cが町田の顔をみて頷  
く。町田の横に座っている新井。

○同・居間

新井「先輩の面談……すごかったです」

町田「患者の人生観に集中治療がマッチするか、自身の経験をもとに話したただけだよ。まあもちろん俺も経験はまだまだ足りないけどね」

町田「こういう話を家族と話し合うことで、仮に急変で救急搬送されても、新井たちが治療方針に迷わないだろ？」

新井「先輩、俺らのことも考えてくれていて本当にありがたいっす」

白井が笑顔で、町田と新井のもとに歩み寄ってくる。

白井「患者家族から、町田先生のおかげで急変後のビジョンも見えて良かったって。すごく感謝してましたよ」

新井「さすが、先輩」

新井が町田を軽くからかう。少し扉が開いている会議室から、声が聞こえてくる。反応する町田と新井。

○同・会議室

高橋が椅子に座っている。我那覇が

心配そうな顔で高橋の横に座っている。

高橋の目の前に、施設患者家族の棚原

仁（60）と棚原空子（55）が重た

い表情を浮かべて座っている。高橋が

イライラした表情を浮かべている。

高橋「ですから、お父さんには心停止した時

の蘇生行為は勧められないと言っているん

です。たとえば心臓の動きが戻ったとして、

植物状態になってもいいんですか？」

仁「延命は望まないと思うけど、また親父が

話せることはないのかね？」

空子「先生の経験ではみんな植物人間になる

ってことですか？」

「終末期医療に関する意思確認書」を手

に取って、仁と空子を見る高橋。

高橋「今日は決まりそうにないので、他の家

族とも話し合ってきてください、失礼し

ます」

会議室の扉を開けて外に出ていく高橋。

我那覇「高橋先生！」

我那覇が、仁と空子に深く頭を下げて謝っている。

○同・居間

町田と新井が会議室の会話を聞いている。出てきた高橋が、町田と新井の姿に気付く。

高橋「町田先生、新井。いたんですね……」

少し罰が悪そうな表情を浮かべる高橋。

高橋「本当困っちゃいますよね、家族のインテリジェンスが低いというか」

立ち去ろうとする高橋に町田が声を掛ける。

町田「高橋先生」

町田の方を振り返る高橋。

町田「先生は、主治医としていったい何人の植物状態の患者を見てきたの？」

一瞬ハツとする高橋だが、すぐに表情を変えて、町田と新井の方を見る。

高橋「次の診療があるので、失礼します」

町田と新井の方に軽く会釈して去って  
いく高橋の後ろ姿。

（回想はじめ 一年前）○三原病院・ナース  
ステーション

高橋（28）が救急部長の三浦（55）  
の横に立っている。三浦は、正面に立  
っている指導医の島田（35）に高橋  
を手のひらで示す。

三浦「救急科専攻医一年目の高橋先生」

高橋「高橋です。ご指導のほど宜しくお願い  
します。初期の時は、同期よりたくさん経  
験を積んできたつもりです」

島田「指導医の島田だ、よろしく」

自身ありげな表情の高橋をやや厳しい  
表情で見つめている島田。

○同・初療室

高橋が患者B（70）に気管内挿管を

試みているが難渋している。横で厳しい表情で見ている島田。モニターの酸素飽和度が、80%を示し、アラームが鳴る。

島田「代われ」

高橋をどかして、瞬時に挿管を成功させる島田。島田が横目で高橋を見ている。

島田「同期よりたくさん経験積んだ？　そんなの俺らにとっては大差ない。高橋が本当に成長していくのはこれからなんだよ」

高橋が悔しさを押し殺している表情をしている。

○同・医局

高橋が自分のデスクで、電子カルテを見ながら疲れた顔でレポート作業をしている。ふと壁の時計を見ると「22時」を指している。机の上の給与明細を開けるが、額面にうんざりした高橋

は、思わずレポートを机の上に叩きつける。

○同・初療室（夜）

交通外傷の患者C（55）がベッドの上に寝ている。島田が超音波検査を終えて、高橋の方を見る。

島田「高橋、胸腔ドレーンいけるか？」

高橋「はい」

高橋がドレーン挿入の処置をしているが、難渋して焦っている。

高橋「なんで……」

モニター上の血圧や酸素飽和度が徐々に下がってきている。

島田「高橋変わるぞ」

高橋「大丈夫です、できます」

モニター上の血圧や酸素飽和度のアラームが鳴っている。

島田「高橋！」

高橋「代わります……」



手を下ろす高橋。高橋は悔しそうな表情で、代わった島田の手技を見ている。

○同・廊下（朝）

高橋と島田が横並びで歩いている。

島田「昨夜の患者さん、危なっただぞ」

高橋「すみません……」

島田「なあ、高橋。先生は専門課程の一年生

なんだ。俺らと経験が違う。出来なくて

も何も恥ずかしくない」

高橋「……」

浮かない表情で下を向いている高橋。

島田「でもな、俺らに『ちゃんとできない』

って言ってくれないと今後安心して任せら

れない」

島田「来月から一年目にも主治医を持たせる

が……すまんが、お前は主治医枠から外れ

てもらおう」

高橋が啞然とした表情で立ち去る島田

の後ろ姿を見ている。

○同・医局

高橋がスマホで医師の転職サイトのホームページを見て画面をスクロールしている。何かの募集を見つけてスクロールしている手を止める高橋。

○レストラン・ソファ一席

やや懐疑的な表情で座っている高橋。  
対面に座っているリクルート会社の池上（40）が高橋に名刺を渡す。

池上「本当助かりました」

名刺をちらりと見て顔をあげる高橋。

高橋「あの……資格とか経験はないんですけど本当に大丈夫なんですか？」

池上「何おっしゃっているんですか」

池上が笑っている。

池上「最近は初期研修終わったばかりの先生も珍しくないですよ」

高橋「そうなんですか？」

池上「先生は今、専門課程の一年目でしたっけ？」

高橋「はい……」

池上「薄給、当直、残業、上司や組織へのストレス。正直自分の思い描いていた世界と違っていたんじゃないですか？」

池上「先生はもう初期研修医じゃない。自由の身なんですよ」

顔をあげて、池上を見つめる高橋。

高橋の懐疑的だった表情に少しずつ変化が出てきている。

#### ○三原病院・部長室

椅子に座っている三浦。机を挟んで高橋が立っている。高橋は白衣の内側のポケットから退職届を出して、机の上  
に置く。

三浦「本当に辞めるのか？」

高橋「はい。お世話になりました」

頭を下げ、部長室を出て行こうとする

高橋。

三浦「高橋先生」

三浦に呼び止められた高橋が振り返る。

三浦「確かに専門医を取るまでの三年間は正直しんどい。特に今の先生の時期なんて下積みに感じるだろう」

三浦「その中で君も主治医として患者を診る時期が来るはずだ。そこが実は一番きつい」

軽く笑っている三浦。

高橋「部長は、何がおっしゃりたいのですか？」

三浦「主治医として患者や家族と向き合い、他の医療職の意見も聞きながら治療をしていく。その結果に悩んで頭を抱えながら、時には成功体験として、専攻医は成長していく」

三浦「いつかその大事な忘れものを取り戻したくなる時が来るよ」

軽く鼻で笑いながら、三浦に会釈して

部長室を出ていく高橋。

（回想終わり）

○有料老人ホーム花・玄関前（夕）

町田、新井、金城が玄関から出てくる。

手元に名札がないことに気付く町田。

町田「すみません、名札どこかに忘れちゃいました」

金城「大丈夫よ、車で待っているから」

金城を見て、軽く頭を下げて玄関に

戻っていく町田。

新井「俺も探してきます」

町田の後を追って玄関へ向かう新井。

○同・居間（夕）

新井「先輩、どこに置いたんですか？」

町田「新井ごめん、一階探してきてくれな

い？」

新井「わかりました」

新井が町田と別れて反対方向へ向かっていく。一人になった町田の元に、我

那覇が血相を変えて駆け寄ってくる。

我那覇「町田先生、助けて……」

町田が驚いた表情で我那覇を見ている。

○同・個室（夕）

ベッドの上で呼吸を荒くして、具合が

悪そうに寝ている菊池和夫（80）。

白井が血圧を測っている。白井は部屋

に入ってきた町田と我那覇の方を振り

返る。

白井「主治医の高橋先生、あと15分で来る

そうです」

町田「この患者さんは？」

我那覇「菊池さん。数日前から熱発して具合

は徐々に悪くなっていたけど、解熱薬の指

示だけだった」

白井「収縮機血圧が70しかありません」

町田が菊池の手を触りながら、お腹を

診察している。町田の表情が曇る。

○同・個室（夕）

個室の入り口から高橋が現れる。

高橋「状況は？」

我那覇「血圧が70しかない」

高橋「え……そんなの搬送だよ、救急搬送」

高橋が我那覇を見る。

高橋「救急車呼んで。紹介状はあとで書くから」

我那覇と白井が冷めた表情をしている。

高橋が部屋を出て行くとする。

町田「高橋先生！」

高橋に鋭い視線を向ける町田。

町田の目の奥には怒りが籠っている。

町田の声色と表情に驚いている高橋。

町田「先生は菊池さんの主治医だろ？　まして一度救急科を目指した先生が目の前の患者と向き合わなくてどうするの？」

呆然と立ち尽くしている高橋。

町田「主治医として、まずは患者を診察して、他の医療職に指示を出してくれ」

新井が名札を手に部屋に入ってくる。

新井「先輩、ここにいたんですか、探しましたよ」

新井から名札を受け取り、耳元で何かを囁いている町田。

新井「え？ わかりました」

部屋を出ていく新井。

○車内・運転席（夕）

やや心配そうな表情を浮かべている金城。

金城「遅いわね……」

スマホの着信音が鳴っている。画面に

「村井正和」の表記がされている。電

話に出る金城。

村井「院長？」

村井（声）「金城さん、今大丈夫？」

金城「ええ、どうしました？」

村井（声）「ちょっと相談があっただけ。できれば人がいないところがいいけど……」



金城「今なら大丈夫です」

車内で通話中の金城。

○同・個室（夕）

高橋がベッドサイドで必死に菊池の腹部の診察をしている。一通り終えて立ち上がる。

高橋「我那覇さん、静脈路確保と細胞外液を全開投与でお願いします」

我那覇は足側の布団を捲り、足に既に確保していた静脈路を出す。空の点滴の袋も横にある。既に確保された静脈路と空の点滴の袋を見て驚く高橋。

我那覇「落としていいですか？」

高橋が再測定した血圧値を見て頷く。

高橋「お願いします」

高橋「白井さんは家族さんに連絡をお願いします」

白井が頷いて施設携帯から家族へ電話をかける。

白井「……すいません、あとのくらいですか？」

白井「5分ですね、わかりました」

高橋「5分？」

高橋が驚いた表情をしている。

町田「俺はどうしたらいい、高橋先生？」

一呼吸おいて町田を見る高橋。

高橋「町田先生は、救急車の手配をお願いします。胆嚢炎による敗血症性ショックの可能性があつて、病院での治療が必要です」

町田「全身観察できていなかったのは減点だが、良い判断だと思う」

外から近づいてくる救急車の音。

町田「高橋先生、菊池さんを下に降ろしてもいいかな？」

○同・玄関先（夕）

救急車が到着する。

救急隊員A（28）が後ろの扉を開ける。

救急隊員B（25）が降りてくる。

テキパキとストレッチャーを下ろす救急  
隊員 A と救急隊員 B 。

施設のストレッチャーに寝ている菊池。

点滴バッグを持っている我那覇。立っ  
ている町田と高橋。新井が遅れて建物  
から出てきて、町田の横に立つ。

町田の視線の先には救急車の後ろにド  
クターカーが停まっている。

ドクターカーのユニフォームを着た高  
井玲奈（30）が現れて、我那覇の持  
っている点滴バッグに触れる。

高井「代わるわ」

我那覇が高井を見て会釈する。

新井「高井さん……」

高井をみて嬉しそうな表情を浮かべる

新井。高井の奥から、ドクターカーの  
ユニフォームを着た島崎（30）が現  
れる。新井の嬉しそうな表情が若干半  
減している。島崎は新井の視線に気付

く。新井を一瞥して町田を見る島崎。

島崎「あとはこっちで引き継ぎます」

町田が高橋に目配せをする。

高橋「胆嚢炎による敗血症性ショックを疑っています。点滴二本目開始して血圧は何とか持ちあがりつつあります。よろしくお願いします」

高橋に頷き、救急車に乗り込む島崎、高井。救急隊員Aがドアを閉めてほどなくして救急車が出発する。救急車の姿が見えなくなるまで見送る高橋、町田、我那覇、新井の四人。

○車・外観（夕）

運転席の扉を開けたまま、立っている金城が一部始終を見ている。

○有料老人ホーム花・玄関先（夕）

町田が何かを思い出したように新井に声を掛ける。

町田「新井、ごめん。名札部屋に忘れてきたみたい」

新井「えー、またですか？　しっかりしてくださいよ」

新井が玄関から建物の中に入っていく。  
横に立っている高橋の方をみる町田。

町田「高橋先生、ちょっといい？」

○同・建物裏側ベンチ（夕）

ベンチに座って缶コーヒを飲んでい  
る町田と高橋。

町田「ごめんね、高橋くん。さっきは強く言  
い過ぎたところもあった」

高橋「とんでもないです。主治医として未熟  
でした」

町田「先生って新井と同期なら今は専攻医の  
二年目？」

高橋「そうですね……」

町田「俺が一年目の時は知識や技術もさっぱ  
りで。やっと主治医で患者持ち始めた時期

だな」

少し驚いたような表情で町田を見ている高橋。

高橋「意外でした。新井からは救命センターのエースだったって聞いていたんで」

町田「結構苦勞したんだよ。新井はまだ救命センターにいなかったから知らない」

軽く笑って高橋を見る町田。

町田「でも、主治医として患者持ってからがさらに地獄だったよ」

町田「他の医療者と意見合わない時もあるし、患者家族との面談で治療方向性がなかなか決まらないことだってあった。頑張って治療しても、助からない患者の方が多かった」

高橋「想像しただけで辛そうですね……」

町田「でしょ？」

町田「でもね、経験を重ねていくうちに、他の医療者を尊敬したり、患者家族の思いが分かったり、助かる患者も増えていくんだよ」

町田「今日の面談で心肺蘇生を望んでいる家族がいたよね？」

高橋「はい。俺は蘇生しても植物状態になるからやめた方がいいって」

町田「俺も何となくそう思っていた時期があるよ」

町田「ただ専門医取るまでに、いろんな家族と出会ったし、家族の思いも汲んで蘇生後の患者を診てきた。もちろんまだまだ俺も経験は足りないけどね」

町田「その中で元気になる人だっていたし、やっぱりダメだった人もいる」

高橋が下を向きながら、町田の話を黙って聞いている。

町田「伝えたいのは……患者や家族に何となくで、治療方針を提示してほしくないんだ」

高橋の肩を優しく叩く町田。

高橋がうなずいている。

自動販売機の後ろに隠れて名札を握って二人の会話を聞いている新井。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

診療を終えた町田、金城、新井の三人がオフィスに入ってくる。椅子に座っている村井が新井に声を掛ける。

村井「新井先生、どうだった一日の同行見学は？」

新井が村井を満面の笑みで見る。

新井「すごく勉強になりました、ありがとうございます」

村井「そうか、町田先輩はどうだった？」

新井「やっぱり先輩の後輩で良かったって思いました」

新井「明日から前田救命センターに戻って町田先生に負けないくらいの救急医を目指します」

町田「なんだよ、新井」

恥ずかしそうな表情を浮かべ、横にいる新井を小突く町田。村井が笑みを浮かべて町田と新井のやりとりを見てい



る。村井は視界に映った金城の方を見るが、目が合った二人は何とも言えない表情を浮かべている。

○前田救命センター・トイレ（朝）

T「二週間後」

外科部長の鈴木健（52）が洗面台の鏡で自身の眼球結膜を見ている。左腰を触りながら何かを疑っている表情をしている。

○同・手術室（昼）

点灯中だった手術室の電光掲示板が消える。扉が開く。外科医の石原翔（37）が出てくる。目の前に鈴木が立っている。鈴木を見る石原。

石原「部長？」

鈴木「手術は？」

石原「無事終わりましたよ」

鈴木「そうか。流石だな、アメリカ帰りは」

少し照れ臭そうな表情を見せる石原。  
石原が鈴木に軽く会釈してその場を去ろうとする。ためらいの表情を浮かべている鈴木。

鈴木「石原」

鈴木の方を振り返る石原。

鈴木「少し頼みがある」

少し怪訝そうな表情で鈴木を見ている石原。

○病院説明会・会場入り口（朝）

「救急専攻医募集のための病院説明会」  
と書かれた看板が立てかけられている。  
スーツ姿で入口に立っている高橋。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

町田と五十嵐が談笑している。村井が二人に声をかける。

村井「町田先生、五十嵐くん。朝礼はじめても大丈夫かな？」

村井の方を振り返る町田と五十嵐。

町田、五十嵐「すみません」

町田と五十嵐が村井に対して申し訳なさそうな表情を浮かべている。村井が朝のミーティングをはじめめる。町田、金城、五十嵐の三人が真剣な表情で聞いている。

村井「最後に、在宅の新患を紹介したいと思う」

村井「加藤 一志さん、70歳男性、肺がん末期の患者だ」

正面に座っている金城が浮かない表情をしている。金城の表情に気付く町田。

町田「金城さん？」

村井が金城を心配そうに見ている。

村井「加藤さんはー」

金城が顔をあげる。目の奥には一抹の怒りが籠っている。

金城「加藤さんは私の元父親よ、二十年前に別れた……」

町田、五十嵐が驚きの表情で金城を見ている。

（第6話「終末期」に続く）